

要旨

自己投影としての「闘士サムソン」

江野沢一嘉

「士師記」の記述からわれわれが脳裏に描くサムソンの人間像とミルトンの『闘士サムソン』が読者に印象づけるサムソン像との間には、かなりの相違が認められる。士師サムソンは、腕力こそ強いが、わがままで、その行動は、しばしば幼児的、かつ、直情径行的である。それに対して、『闘士サムソン』に登場する主人公サムソンは、ペリシテ人に捕らわれて、眼をえぐりとられ、足枷をはめられて、過酷な労働を強いられる奴隷である。しかし、サムソンを悩ませているのは、この奴隷的境遇が彼に与える肉体的苦痛というよりは、むしろ、そのような境遇を招いた根本的な原因が彼自身の〈人間的な弱さ〉にあるとの自覚である。その自覚のゆえに、サムソンは痛恨・自責の念に苛まれているのである。

サムソンは同胞の慰問者たち（コロス）の同情や、息子を身代金と引き換えに救出するという父親（マノア）の提案を拒否する。彼は自分を裏切った妻（ダリア）が現れて、夫との和解を求めても、その訴えをすら拒否する。このように、導入部に続く5つの場面のうち最初の3つを特徴づけるのは、サムソンの、頑なとも言える拒否行動である。第4の場面では、ペリシテ陣営の卑劣漢（ハラファ）が現れ、サムソンを嘲笑する。サムソンも侮蔑的な言葉で応酬する。最後に、ペリシテ人の役人が現れ、サムソンを闘技場に召喚する。ところがサムソンは、最初こそ、拒否するが、最後には召喚に応じるのである。〈拒絶〉から〈受諾〉への主人公のこの転換をどう解釈すべきか？ ここで、ミルトンが『闘士サムソン』を執筆した時期と動機が問題になる。

執筆の時期と動機については、研究者の間で諸説があり、筆者の見解も憶測の域を出ないが、筆者はミルトンの初婚の躓きを重視したい。初婚の相手メアリが、新婚早々、里帰りをしたまま、夫のもとに帰ろうとしなかったのは1642年の夏である。再三の手紙による夫の帰宅要請をメアリが無視したことにミルトンは「大いに怒って」「離婚論」の執筆に着手したという（エドワード・フィリップス）。この時、ミルトンが痛感したであろう〈女性不信〉は「闘士サムソン」のダリラに対する激しい拒絶反応と無関係ではないと筆者は考える。ミルトン

のメアリとの疎遠は、後日、彼女が夫に詫びを入れ、彼がこれを受け入れたことで一件落着を見る(1645)。拙論は、この間のミルトンの心理的推移を『闘士サムソン』の主人公の心境の変化と関連づけて解釈しようとするものである。

サムソンがペリシテの役人の闘技場への出場命令を、最初は拒否しておきながら、最後には受諾したのはなぜか。筆者は、サムソンは役人の2度目の命令を受諾した時点ですでに、現実<拒絶>から 現実<受容>へと精神の転換を遂げていたと考える。

<理想>と<現実>の狭間で果敢に<理想>を追求したミルトンには、不可避免的な<現実>に直面した時、これを一種の諦念をもって甘受する度量があった。メアリとの初婚の躓きはミルトンに癒しがたい精神的苦痛を与えたが、彼が妻との和解に同意したのは、人間ミルトンの度量の大きさを示すものである。一方、自らの<愚かさ>が招いた過失が己れ自身の精神的未成熟に起因することを自覚したサムソンは、闘技場に向う直前になって、はじめて崇高な人間の姿を見せる。ミルトンと同様にサムソンもまた成熟に達したのである。サムソンはミルトン自身の自己投影なのである。

Abstract

Samson the Agonist as a Projection of Milton's Selfhood

Kazuyoshi Enozawa

There is a great deal of divergence between the image of Samson conjured up in our minds from reading Judges: chapters 13 to 16 and that which strikes us when we read *Samson Agonistes*. Samson as depicted in those chapters of Judges is a young man of extraordinary physical strength whose mentality, however, is so immature – almost as childish as a spoilt kid – and whose behaviour is as impulsive as that of a hot-headed rough-neck. By contrast, Samson as we see him in Milton's tragedy is a miserable slave who, with his eyes plucked out and his feet fettered, was forced to labour in a mill. What torments him, however, is not so much his bodily pains as his mental or spiritual agonies resulting from the realization of his own past folly in revealing the secret of his strength to a woman who was bent on betraying him into the hands of his Philistine foes.

Comforters (in the role of a chorus in a Greek tragedy) come to visit and console him with sympathetic comments. But Samson rejects their consolations. Then comes his old father Manoa, who, aghast at the plight of his son, offers to arrange ransom with the Philistine lords. After Manoa comes Samson's wife, who had beguiled him. She pleads with him to accept her proposals for reconciliation. Samson gives vent to his anger, rebuking her in the harshest of all words. Then Harapha comes round and challenges Samson with his bombast. Then, a Philistine officer comes to summon Samson to the "agon" or "fighting arena", not for the sake of a fighting as such, but for the sake of providing fun for the Philistine spectators in celebration of a feast dedicated to their god Dagon. Samson first refuses to comply, but upon a Philistine messenger coming a second time to fetch him, he does comply with their orders. What has made Samson change his mind?

The question may best be answered in terms of the changes Milton himself went through during the time his wife Mary stayed away from him. Milton's distrust of womanhood tormented him all the while, but when Mary came back to him in 1645 and begged him to forgive her for her past misconduct, Milton, though he may initially have had some difficulty in pardoning his wife, did pardon her after all. This course of domestic affairs may suggest a gradual maturing of Milton's mentality, and some such maturing process is seen also in the change of mind which Samson had gone through. Samson's final acceptance of the Philistine orders to present himself in the arena may be taken as an indication that at that point he had already passed from the stage of "rejecting" everything according to his own principles, to that of "accepting" something, if not all, even if that may compromise his principles. In that sense, Samson may be thought of as a projection of Milton's maturing selfhood

自己投影としての「闘士サムソン」

江野沢 一嘉

ミルトンの『闘士サムソン』は、旧約聖書の「士師記」第13章-16章に記述されている士師サムソンの物語を素材とする劇詩である。この作品が舞台での上演を意図したものではないこと、それにもかかわらず、古典ギリシャ悲劇を模して創作されたものであることは、作者自身の巻頭言によっても、また、その構成や韻律に関するミルトン学者たちの研究からも、明らかである。¹

この作品が、形式上、古典悲劇の構成要件を完全に満たしているかどうか、その精神が「古典ギリシャ的」であるかどうか、については、Samuel Johnson以来、批評家の間でさまざまな議論が行われている。² また、ミルトンと同時代、あるいはそれ以降の読者がこの作品をどう解釈したか、そして今日の読者がどう解釈しているか、についてもさまざまな批評がある。³

¹ 包括的な研究は Willam Riley Parker, *Milton's Debt to Greek Tragedy in Samson and Agonistes* (1937) に始まる。比較的新しい研究では Mary Ann Radzinowicz, *Toward Samson Agonistes: The Growth of Milton's Mind* (1978) がある。『闘士サムソン』は、形式的には古典ギリシャの悲劇を模したものである。ギリシャ悲劇の主人公の英雄的な最期は観客（あるいは読者）に精神の「カタルシス」（浄化）をもたらすが、ミルトンが意図したのも同様な効果であろう。ミルトンは『闘士サムソン』において、旧約時代の士師サムソンの記述を大枠として踏襲しているが、それは彼の劇詩の「筋立て」として利用しただけである。士師サムソンの性格は単純、その行動は粗暴で、悲劇の「英雄」とは呼びがたい。士師サムソンは最後に壮絶な死を遂げるが、それだけではアリストテレス的な意味での「カタルシス」は起こりようもない。ミルトンもそのことは熟知していたであろう。「カタルシス」を起こすためには、主人公は苦悩する高貴な精神、正義を貫き通す勇気と行動、己れの悲運を懲憑として甘受する潔さ、などの美德を備えていなければならない。『闘士サムソン』のなかで、ミルトンはまさにそのような〈英雄〉としてサムソン像を造型し、それに自己の姿を投影したのだと筆者は考える。

² かつてサミュエル・ジョンソンはミルトンの『闘士サムソン』を評して、この作品

以下の拙論は、そのような先行の研究成果を踏まえた上で、この作品をどう読むべきかという問題についての、筆者なりの個人的見解を、いわば〈試論〉的に展開しようとするものである。

「士師記」の記述に見られるサムソンの人間像

旧約聖書の「士師記」とは、ヨシュア（モーゼの後継者）の死後、祭司サムエルが出現するまでの間の、「士師」（イスラエルの部族を統率する任務を与えられた歴代のカリスマ的指導者たち）の事績を記した書のことである。サムソンはその最後（13代目）の「士師」であった。

「士師記」第13-16章によれば、サムソンは出生前から、生涯、神に捧げられた者、すなわち「ナジルびと」（Nazirite）となるべく定められていた。「ナジルびと」とは、イスラエルの神に対して特別な誓いを立てることによって、「普通のひと」と区別された者のことある。旧約聖書の記述によれば、「ナジルびと」の守るべき掟は3つあった。第1に「ぶどう酒やその他の禁じられた飲料や食物」を断つこと、第2に「（「ナジルびと」でいる期間中）毛髪を切らない」こと、第3に「屍骸に近づかない」ことである。万一、「ナジルびと」が、これらの禁令を遵守しないと、神は「ナジルびと」から離れる、つまり、「ナ

には「はじめ」と「おわり」はあるが、「中間」（＝筋の展開の中間部分）が欠けていると批判した。確かに、一見したところ、この作品の「中間」には筋の展開を示す出来事が欠けているように見える。しかし、この作品を主人公サムソンの心理の起伏と変化という観点から読むならば、これは一種の「心理劇」といえるのではないか。主人公の心理の動きは、むしろ「中間」部においてこそ、読者の胸に緊迫感をもって迫ってくる と筆者は考える。

³『闘士サムソン』の本格的な歴史的批評はまだ現れていないが、この作品の背景を形成する「キリスト教的伝統」についての研究としては F. Michael Krouse, *Milton's Samson and the Christian Tradition* (1963) がある。また、この作品の「ヘブライ的」「ヘレニズム的」「キリスト教的」解釈を批評的に解説した Anthony Low, *The Blaze of Noon* (1974) は有益な入門書である。

ジルびと」に恩恵として神から与えられていた特別な賜物は撤回される、と考えられていた。

ところで、「士師記」の当該の章節の全体を注意ぶかく読むと、サムソンがこれらの掟を遵守するどころか、しばしば無視したり、破ったりしていることに気づかざるをえない。たとえば、もっと思慮分別があってもよさそうに思われる年頃になっても、サムソンはライオンの屍骸に群がっている蜜蜂を見て近づき、その蜜を手にとりて食べながら、タイムナの女の家を訪ねているし(第14章 8-9節)、その女の同胞たちを招いて酒宴を催してもいる(第14章 10節)。サムソンは、土地の習慣に従って、タイムナの女の仲間たちとぶどう酒を酌み交わしたのであろう。当時、タイムナ周辺一帯は異教の神を崇拝するペリシテ人の支配下にあった。タイムナの女もその父親も異教の神を崇拝していたであろう。それゆえ、彼らがダン族(イスラエル部族の1つ)出身のサムソンに対して<気を許した>とはとうてい思えない。仲間に脅迫されて、サムソンの「謎解き」ゲームの「正解」を入手し、それを彼らに通報したタイムナの女は、つまるところ、同胞のために、夫を裏切ったということになる。復讐の衝動に駆られたサムソンは、アシュケロンの町で「30人もペリシテの男ども」を殺し、その衣服を剥ぎとってしまう(第14章 19節)。

また、サムソンはガザの町に出かけて娼婦と寝たり、ソレクの谷でダリラという女と同棲したりしてもいる。放蕩三昧ともいえる、これらの行為は「ナジルびと」としてのサムソンのイスラエルの神への誓いに違反するのではないか、しかも、タイムナの女も、ソレクの谷のダリラも、明らかに異教の女である。イスラエルの神にとっては、サムソンが異教の女と交わること自体、許すべからざる背信行為ではないのか、という疑問をわれわれとしては抱かざるをえないのだ。しかし、不思議なことに、イスラエルの神は、あたかもこれらのサムソンの逸脱行為を黙認しているかのように、沈黙しているのである。この神を、

当時のイスラエル民族の信仰の対象としての「アブラハム、イサク、ヤコブの神」ととるか、後の「キリストの父としての神」ととるかによって、この作品の基本的な性格が「ヘブライ的」であるか、「キリスト教的」であるか、解釈の分かれるところであろう。しかし、若き日のサムソンの数々の逸脱行為にもかかわらず、その段階ではまだ、神がサムソンに「ナジルびと」としての特権と身分を保証しているかのように見えるのはどうしてだろうか？ 闘士サムソンを「ヘブライ的」英雄として、あるいは「キリスト教的」悔悛者（または殉教者）として、肯定的に評価する批評家たちは、こんな素朴な疑問には答えようともしていない。これも、筆者には、解せない点である。

しかし、ともかくイスラエルの神がサムソンに特別な賜物を与えていると思われるのは、サムソンがある種の危機的状况に見舞われると、とたんに彼の全身が超自然的な力で満たされるという現象が起こるからである。たとえば、サムソンが両親と一緒にテイムナの女を訪ねる途中で「若いライオンを素手で引き裂く」場面がある。このとき「神は強大な力でサムソンを支配した」（第14章 6節）とされている。また、テイムナの女の密告で、彼女の仲間たちがサムソンの「謎解き」の賭けに勝ったとき、腹を立てたサムソンはアシュケロンの町に出かけて行って「30人の男ども」を殺して彼らの衣服を剥ぎ取る話はさきに触れたが、このときも「神は強大な力でサムソンを支配した（第14章 19節）」という。同様の記述は、まだ続く。サムソンが潜伏しているエタムの洞窟に同胞（ユダの部族）がやってきて、彼を捕縛した上で、身柄をペリシテ陣営に引き渡したとき、彼は苦もなく縛り綱を破り、地面にころがっていたロバの顎骨を拾い上げ、それを武器として「1000人ものペリシテ人」を殺したのだが、このときも「神は強大な力でサムソンを支配した（第15章14-15節）」というのである。

このように、サムソンがイスラエルの敵であるペリシテ人を相手に戦いを挑む

ときには、つねに驚異的な腕力を発揮する。このことから、イスラエルの神は、「ナジルびと」としてのサムソンの数々の逸脱行為にもかかわらず、そのゆえをもって彼を咎めることをしないばかりか、異教徒との戦いが起こると、つねに「闘士」としてのサムソンに加護を与え続けたことがわかるのである。

本筋から逸れるが、ここで筆者がサムソンを「闘士」として捉えていることにご注意願いたい。“Samson Agonistes”の“Agonistes”の訳語としては「闘士」のほか、「闘技者」、または「闘技士」、あるいは「力者」が考えられ、現に、わが国の翻訳者はそれらの訳語のいずれかを用いている。筆者は、“Agonistes”なる形容語が語源的には“agon”（闘技場）に由来するので、「闘技者」とか「闘技士」と訳すのも一理ありと認めるにやぶさかではないし、サムソンが、すくなくとも「ナジルびと」としての特権を享受している間は怪力の持ち主であったので、「力者」と訳すのもあながち見当ちがいはと言えないと思う。しかし、これらがサムソンの一面を捉えた訳語であることは否めず、この作品全体をサムソンに代表される「戦う者」の悲劇として捉えるならば、「戦士」または「闘士」と訳すのが妥当であろう。その場合、戦う相手が異教徒としてのペリシテ人であるか（＝ヘブライ的解釈）、あるいはミルトンの時代の政治的・宗教的権力（国王専制であれ、長老派の思想統制であれ）であるか（＝急進的プロテスタント的解釈）については、研究者の間で意見が対立している。筆者はどちらの見解にも無条件で賛成する者ではない。また、サムソンについてのキリスト教的立場からの象徴的解釈、たとえば、サムソンの死をイエス・キリストの十字架上の死になぞらえるような解釈は、筆者の首肯するところではない。拙論はむしろ、サムソン（あるいはミルトン）の精神的・内面的成長に焦点を合わせた「人間学的」解釈とでもいうべきものである。本題に戻ろう。

「士師記」に登場するサムソンについてわれわれが抱く第1の印象は、彼が途

方もない怪力の持ち主であるということである。しかし、筆者が注目する第2の印象は、彼がその怪力を発揮する動機である。その動機が、発作的というか、ともかく衝動的であるという印象は拭いがたい。テムナの女の家を訪ねる途中で、サムソンがライオンを素手で引き裂いたのは、ライオンが、突然、襲いかかってきたためかもしれない。身の危険を感じ、とっさに防衛本能が働いたのだと言えなくもない。猛獣から身を守るための、いわば「正当防衛」である。エタムの洞窟から出てペリシテ人の前に引き渡されたサムソンが、ロバの顎骨で1000人もペリシテ人を倒したのも、相手が「喚声を上げて襲いかかってきた」(第15章 14節)ためであって、サムソンとしてはやむをえない応戦であったと言えなくもない。しかし、サムソンがアシュケロンの町で「30人もの男ども」を殺したり、後日、「300匹のきつね」を捕らえて、2匹ずつ、尻尾を結び合わせ、その結び目にたいまつ火をつけて畑に放ち、穀物は言うにおよばず、付近のぶどう園やオリーブ園の樹木まで焼き尽くした(第15章 4-5節)のは、弁護の余地もない蛮行と言うべきであろう。その動機は単なる〈腹いせ〉であり、子供じみた〈復讐〉である。そこには、成熟した人間の理性的判断の一片すら見出せない。

筆者が注意を喚起したい点は、サムソンの粗暴で短絡的な行動には、どこか幼児的未熟さを感じさせるものがある、ということである。たとえば、テムナの女に一目惚れしたサムソンは、家に戻るとすぐ、両親に「おれはテムナで見たペリシテ人の若い娘を妻にしたい」と宣言する(第14章 2節)。両親は「われわれの同族、あるいは他のイスラエル部族の中に、お前が結婚できそうな女は一人もいないのか？ 妻を見つけるのに、なにもわざわざ異教のペリシテ人のところへ出かけて行く必要もないだろうに」と言って、息子をたしなめるのだが、息子は「あの娘が気に入った。妻にしたい」の一点張りである(第14章 3節)。結局、両親は、不承不承、息子のわがままな要求に屈するのだが、当該箇所の記事を読むかぎり、われわれはサムソンが駄々をこねているような

印象を受けるのである。そして、後に続く記述から明らかなように、この結婚については、両親の危惧が正しく、息子の行動が軽率であったことは否定すべくもない。

サムソンが、たとえ戯れにせよ、例の「謎解き」の賭けを持ち出した（第14章12節）のも軽率の一語に尽きる。彼は自分がこの賭けに負けることは絶対になんとも思い込んでいたのかもしれないし、まさか妻が「正解」を同族に知らせるとは夢想だにしていなかったのかもしれない。そうだとすれば、サムソンの愚行は一種の「傲慢」に由来すると断定せざるをえない。いずれにせよ、サムソンが思慮分別のない若者であったことに変わりはないのである。

サムソンの幼児性は、ロバの顎骨1本で1000人ものペリシテ人を打ち負かした後、つぎのように自慢していることから窺えよう。

ロバの顎骨1本で/おれはばったばたと敵をなぎ倒した。

ロバの顎骨1本で/おれは1000人の男どもを血祭りに上げた。

(第15章 16節)

このように、「士師記」の記述に見られるサムソンには人間的未熟さが確かに感じられるのだが、そういう幼児的なサムソンをイスラエルの神は、暫くの間、忍耐づよく見守っていたと思われる。が、その神も、サムソンが第2の妻ダリラの誘惑に負けて、不覚にも、神の賜物としての力の宿っている毛髪を秘密を洩らしてしまったとき、「ナジルびと」の特権は彼から取り上げられるのである。ここで筆者が強調したいのは、妻の手で毛髪を切り取られて弱体化したこのサムソンにこそ、ミルトンは深く共感したにちがいないということである。若気の過ちで、思慮分別を欠いたばかりに神の加護を喪失したサムソンに、ミルトンは自分自身の初婚の躓きを重ね合わせていると考えられよう。いずれに

しても、『闘士サムソン』の中でミルトンが描いたサムソン像と「士師記」に見られるサムソン像との間には、主人公の精神の深さにおいて雲泥の差がある。以下、「士師記」から『闘士サムソン』へと視線を動かして、その中でミルトンがどんなサムソン像を描いたかを点検してみよう。

『闘士サムソン』に描かれたサムソン像

『闘士サムソン』に登場するサムソンは、神の賜物である力（絶大な腕力）を奪われた結果、宿敵ペリシテ人に捉えられ、眼をえぐり取られ、真鍮の足枷をはめられ、むさ苦しい牢獄で他の奴隷や動物とごこ寝させられ、昼間は粉引き場で、終日、苦役を強いられる奴隷である。肉体は衰弱して、往年の面影の片鱗すらない。唯一の慰めは、休息のひとつき、土手に出て、陽だまりや木陰の中で、疲れた体を横たえることである。たまたま、この日は、ペリシテ人がイスラエルとの戦いに勝利したのを祝って、彼らの神（ダゴン）に感謝を捧げる祭りの日ということで、労役を解かれて休息する許可がサムソンにも与えられた。サムソンは、わが身の境遇の変化に万感の思いを禁じ得ない。

こうして人通りのない場所に、安らぎを求めてやってくるのだが、
体こそいくら休まるものの、心にはさまざまな思いが
次から次に起こって休まる暇がない。

まるで、恐ろしい針で武装したすずめ蜂の群れが、
私が一人でいる隙を見て、大挙して襲いかかってくるかのようだ…。

(16-21)

そして、つくづく、われとわが身の不運を嘆くのである。

私は、生まれる前から、イスラエルの民をペリシテの鎖から解放する

という特命を神から与えられていたのに、なぜ、
このように裏切られ、捕らえられ、両眼をえぐられ、敵から蔑みの目
でじろじろ見られ、真鍮の足枷をはめられ、天から授かったこの力を
労役のために利用されて死んでいかねばならないのか？ (30-36)

サムソンの悲歎は〈自己憐憫〉という形でしばらく続く。過去の栄光から、一
転、奈落の底に突き落とされた己れの境遇の変化（とりわけ、視力を奪われた
身の不運）を嘆いて、サムソンは言う。

ああ、暗い、暗い、暗い！ 真昼の輝きのまっただ中なのに
取り戻しようもなく暗い、この漆黒の闇の中で、二度とふたたび
日の目を見ることができないのだ。 (80-82)

盲目の身にどんな希望が残されているのか？確かに生き長らえてはいる。しか
し、これでは墓場の中にいるのも同然、いや、「わが身そのものが墓石」なの
だ！とサムソンは悲痛なうめき声を上げる。

ああ、このざまはもっと惨めだ！
わが身そのものが墓石だ。動く墓場だ。
すでに死んだも同然なのに、
死と埋葬の特権も与えられずに、もっとも過酷な 他の災い、苦しみ、
不当な仕打ちに
晒されねばならぬとは！ (101-105)

しかし、サムソンはわが身に降りかかった不運をいつまでも嘆いているのでは
ない。彼は、不運の原因が、とどのつまり、自分自身の過去の過失にあること
に思っていたるのである。

自分以外のだれに不満をぶちまけることができようか。

私に託されたこの偉大な力が、

体のどこに据え置かれようと、

最後まで沈黙の封印を護り通せずに、

女ひとりの執拗な涙に打ち負かされて、

心ならずも開封を許してしまうとは！

おお、強力な体に宿る心の、なんと無力なことよ！ (46-52)

これは、＜自己憐憫＞から、深刻な反省を経て、ようやく到達した一種の諦念である。しかし、人間、そう簡単にこの諦念に到達できるものではない。サムソン（ミルトンが想像力によって築き上げたサムソンであって、「士師記」に描かれているサムソンではない）のような自尊心の強い男には、なんとも耐えがたい不快な感情を経験しなければならない。この不快感を、筆者は＜自己嫌悪＞と呼ぶのである。

サムソンの悲歎は、同胞の慰問者たち（コロス）の登場で中断される。往年のサムソンの精力旺盛な活動を知る彼らは、敗残のサムソンの変わり果てた姿を見て、驚き、かつ、訝しむのであるが、応対するサムソンの言葉には、彼の内面の苦悩を知らない者に対する痛烈な皮肉が込められている。

おお、よく来てくれたね。おかげで私は生きかえったような気がする。

それというのもー

人づての話からではなく、自分自身の経験からわかったことだが、

「友だち」と称して近づいてくる連中は（全部がそうだとはいわないが）たとえ正真正銘な刻印が押されていても、じつは、偽の貨幣みたいなもので、羽振りのよいときには、わんさと寄ってくるのに、いったん落ちぶれると、たちまち離れていくからねえ。 (187-192)

きみたちは、この私がどれほど多くの災いに取り囲まれたか、わかっているだろうが、なかでも最悪の災い、つまり、盲目にされてしまったということだが、これが、いまとなっては苦痛の最も少ないものになってしまったのさ。それというのも、
仮りに目が見えたら、恥ずかしくて、いつときも眼を上げたり、
頭を上げたりすることなどできないだろうからね。 (193-197)

ここでサムソンが「目が見えたら、恥ずかしくて…」と言っている理由は、それに続くつぎの言葉から明らかである。

なにしろ、私は、愚かな水先案内人のように、天から託された豪華な船装の船を難破させてしまったのだから。そう、一言でいえば、一粒の涙のために、神から与えられた賜物の秘密を洩らしてしまったのだー欺瞞にたけた女にね。 (198-202)

これをサムソンの抜きがたい〈女性不信〉の表明とすることは可能だが、筆者は、むしろ、妻ダリラの執拗な訴えに根負けして大事な秘密を洩らしてしまったサムソンの、己れ自身の「愚かさ」、あるいは「弱さ」の告白ととりたい。実際、それがサムソンを苛む〈自己嫌悪〉の根本的な原因であることは疑うべくもないからである。サムソンは告白する。

私のいまの苦悩は
彼女のせいではない。私自身のせいなのだ。
耳をつんざくばかりの訴えに打ち負かされて（おお、なんたる弱さよ！）
私の沈黙の砦を女に明け渡してしまったのだ。 (233-236)

第2の場面では、サムソンの父親マノアが登場する。マノアは、変わり果

てた息子の姿を見て、ひとしきり愁嘆する。そして、愁嘆のあまりマノアは、息子をこんなにもひどい目に遭わせた神に対し、怨嗟の声を上げる。それは、第1の場面で、サムソンが〈自己憐憫〉に駆られて、思わず口にしたのと同じ怨嗟である。しかし、第2の場面では、もうサムソンは神に向ってそのような不満を口にしない。それどころか、つぎのように、父親に懇願するのである。

父上、天の配剤に注文をつけないでください。

これらすべての災いのうち、一つとして私に

不当に降りかかったものはないのです。私自身が災いを招いたのです。

私だけが張本人、私だけが原因なのです。

もし、なにかがひどいものだと思われたとしたら、それは

私の愚かさなのです…。

(373-377)

ここにはもはや自分自身の境遇に対する悲歎、すなわち〈自己憐憫〉は感じられないし、自分の「愚かさ」を告白してはいるものの、その「愚かしさ」に対する〈自己嫌悪〉は、すくなくとも明らさまには表白されていない。そのことから、サムソンは自分が置かれた境遇を不可避的な運命、つまり「宿命」として受け入れる心境（一種の諦念といってもよい）に達したと見られるのである。むろん、「宿命」と言うかわりに「天命」と言ってもよいし、「キリスト教」的な用語を用いて、「天の配剤」、または「神のみ旨」と言い換えてもよからう。

しかし、この諦念も、第3の場面でかつての妻ダリアが登場して、サムソンが〈夫への裏切り〉と見なした彼女の行為を弁明し、和解を訴えると、たちまち消え失せてしまう。いや、慰問者たち（コロス）が彼女の到来を告げた瞬間から、サムソンの胸中には過去の苦い記憶がむらむらと湧き起

こって、〈憎しみ〉の情念の虜になってしまうのである。

コロス あっ、あれは誰だろう？ 海の怪物かな？ それとも陸の怪物かな？

どうやら、女性のような。いやに着飾って、化粧して、華やいでいる。

おや、こっちに向って滑るようにやってくるぞ。

ヤーワンかカデイールに向けて

タルソスの港を出て行く豪華な客船みたいだなあ。

満艦飾の装いで、帆に風を孕み、吹き流しをなびかせて

四方八方から言い寄る風と戯れているみたいだ。さしずめ

前触れ役に、琥珀の香料の匂いを発散させ、乙女のお供を従えてご入来の、裕福なペリシテの貴婦人といった風情だ。

近づいてきたところを、いま、よく見ると、あれはなんと紛れもなく、あなたの妻ダリラ、そのひとですよ。

サムソン 私の妻だって！ 私を裏切った女だって！ 近づかせないでくれ。
(710-725)

顔を見るのもいやだ、というわけであろう。怒りをむき出しにするサムソンに向って、ダリラは告白する。

ダリラ おぼつかない足どりと揺れ動く心で、あたしはあなたのところにやってきましたの。あたし、いつきも、あなたのお怒りを恐れないことはありませんでしたわ。あなたのお怒りは当然のこと、弁解の余地もありません。それは認めないわけにはまいりません。

でも、涙が罪をあがなえるものなら —といっても、あたし

の行為が原因で不幸な結果を生み、予想以上に大きな災いを招いてしまったことは事実ですが - あなたの懺悔の気持はすこしも変わっていません。もっとも、それでお許しがいただけるかどうか、保証のかぎりではありませんけど。

.....
.....

もし、あたしにできることで、あなたのお苦しみを和らげ、あたしにできる償いで、あなたのお怒りを宥めることができたなら、遅ればせながら、いくぶんでもあたしの軽率な、というよりは不運な、不行跡の埋め合わせができたなら、と、思っ、もう一度、あなたのお顔を見て、あなたの様子を窺いたい一心で、こうしてあなたのところにやってきたのです。それが夫婦の愛情というものでしょうか？ (732-747)

これをダリラの真率な懺悔とみるか、欺瞞とみるかは、意見の分かれるところであろう。むろん、サムソンは、一見、もっともらしいダリラの弁解を受けつけない。最近流行の「フェミニスト的解釈」の立場から言えば、サムソンのそういう態度はいかにもかたくなで、許しがたい！ということになろう。しかし(カトリックは別として) 伝統的なプロテスタントの観点からすると、許しがたいのは、むろん、姦計にたけたダリラのほうで、サムソンは(女の誘惑の)犠牲者だ、ということになろう。それはともかく、ダリラの弁明を頑として受けつけないサムソンは、つぎのような激越な言葉を吐くのである。

サムソン 出て行け、とっとと出て行け、このハイエナめ！これはお前がよく使う手だ。また、お前と同じように嘘つきの女どもの手だ。お前たちはあらゆる信頼、あらゆる誓いを破って、

欺き、裏切るのだ。それからあたかも悔い改めた者のように従順な態度で、哀訴し、悔悛を装って和解し、告白し、新しい人間に生まれ変わるという奇跡を約束する。そんなのは、本当の悔悛ではないのだ。その主な目的は、夫の忍耐がどれほど執拗な妻の要求に堪えうるか、相手が徳の持ち主であろうと、弱い人間であろうと、どのように攻撃したら、相手が陥落するか、を試すことなのだ。それから、さらに念の入った老獪な手管で罪を犯しておいて、またしても詫びてくるのだ。最も賢明で、最もすぐれた男でも、その手管にかかって、なんども欺かれてしまうのだ。彼らは、悔い改める者を否むことなく、つねに許すべしという善行の勧めのおかげで、胸中にとぐるを巻く毒蛇を抱えて、惨めな日々を送らざるをえなくされるのだ。彼らは、手っとり速くいのちの緒を断たれることはないかわりに、末代まで（女のわなに陥った男の）見本とされてしまうのだ — 私がお前の手にかかってそうなったようにな。 (748-765)

この応答には、妻の裏切りによって手痛い目に遭わされたサムソンの〈恨みつらみ〉が一挙に噴き出した観があり、〈諦念〉といった心境からは程遠いというべきであろう。筆者が言いたいのは、つまり、この劇の第1場面から第3場面までは、主人公サムソンが〈自己憐憫〉と〈自己嫌悪〉と〈諦念〉との間を行きつ、戻りつしているということである。

第4の場面では、大言壮語を吐くくせに、じつは卑怯で、臆病な、こけおどし役ハラファが登場して、サムソンを嘲笑し、挑発する。この男は、図体こそ巨大だが、精神は卑小である。苦悩を経て、諦観に達したサムソンの精神の高貴性には比肩しうべくもない。そのサムソンにハラファはのっけから挑発する。

ハラファ サムソン、わしは貴様の不幸を慰めにやってきたのではないのだぞ。

.....

.....貴様の桁はずれの力と手柄については、ずいぶんと噂には聞いているが、わしにはとても信じられぬ。わしが合戦の場に一度も居合わせなかったのは、残念至極というものだ。戦場であれ、闘技場であれ、わしがその場に居合わせたら、たがいに腕だめしができたのにな。わしは、いま、その噂の男をこの目で見て、その腕や足をつぶさに観察し、その男が、一見して、評判どおりの猛者であるかどうか、確かめてみようと思って、やってきたのだ。 (1076-1090)

これに対する、サムソンの素っ気ない返事は、皮肉たっぷりである。

サムソン 見ればわかるというものではあるまい、味わってみることだな。 (1091)

頭にカチンときたハラファは、高飛車にも、こう応じる。

ハラファ おや、もう、わしと一騎打ちする気かね？わしは、てっきり、貴様が足枷と石臼のおかげで、戦う気力をなくしてしまったと思っていたのだが。貴様がロバの顎骨1本で驚くほどの戦果を上げたという評判の戦場で、貴様と一戦交える機会があればよかったのになあ！……貴様の目がえぐり取られてしまったばかりに、挑まれた一騎打ちで貴様を打ち倒すことによって確実に手にする筈の栄誉を、わしは失ってしてしまったの

だからな。

(1092-1103)

こんな調子でハラファとサムソンの間で応酬が交わされるのだが、ハラファにはサムソンの挑戦に応じて一戦を交える気持は、最初からないのである。サムソンの挑戦を、ハラファは、せせら笑って受け流す。

サムソン お前がやってみたかったことを自慢するな。やってみたいと思うなら、やってみるがよい。だれも邪魔しないことぐらい、お前だってわかるだろう。

ハラファ 目の見えない奴と戦うなんて、おれの自尊心が許さない。第一、その前にお前の、その不潔な体を洗ってもらいたいね。触るのも汚らわしい。

(1104-1107)

ハラファの目的は、サムソンを徹底的に侮辱することである。その目的を果たして引き上げるハラファの後姿を慰問者たち（コロス）は不安な面持ちで見送る。彼らは「ハラファがペリシテの権力者たちのもとに直行し、悪意に満ちた中傷で彼らを煽り立て、あれやこれやの策を用いてあなたをいっそう苦しめようとするのではないか」(1250-1252)と気遣っているのである。サムソンは、しかし、彼らの危惧を打ち消して、こう答える。

サムソン あの男は、もっともらしい理屈をつけて、自分の主張を正当化しようとするだろう。だが、私から挑戦を受けたことを口にする勇氣はあるまい。口にすれば、当然、わたしの挑戦を受けて立つ勇氣があるかどうか問われる。あの男が私の挑戦を受ける勇氣のないことは、まず間違いない、と私は見たのだ。ペリシテの権力者たちにしても、私がすでに身にしみて感じている以上の苦痛を私に加えることなど、できるわけ

もないし、私だって、それは耐えられない。もし、彼らが私の労役から利益を得るつもりならね。なにしろ、私の労働は何万人分の労働に匹敵し、私を養うだけでなく、私の所有主である彼らにも、日々、少なからざる利益を上げているのだから。 (1253-1260)

この返答は、盲目のサムソンの、いわば「心眼」の確かさ、すなわち、人間性に対する透徹した洞察力を示している。腕力だけが取り柄の「士師記」のサムソンとは一味も二味も違う、精神的に成熟したサムソン（挫折を経て、成熟に達したミルトンの、自己投影としてのサムソン）の自信が感じられよう。言うまでもなく、この自信は、思慮分別を欠く「愚かさ」と隣り合わせの「盲信」、あるいは傲慢の所産としての「過信」とは別物である。

このようにサムソンは、現実的状況判断によって、ハラファの讒言の可能性を否定するのであるが、同時にまた、人知の測り知れない「運命」によって個人の置かれた状況が一変させられる可能性のあることをサムソンは否定しない。たとえ、この先、どんな悲運に見舞われようと、ハラファの威嚇を断固として斥けたサムソンには、悲運もまた「運命」として受け入れる覚悟ができていたのである。サムソンの身の上を案じる慰問者たち（コロス）に、彼はつぎのように言う。

だが、どんな事態でも、やって来るなら来るがよい。私にとって最も恐るべき敵は一瞬の間に、私の友となる。死によってこの世から解放されるのだからね。

敵が与える最悪の事態は、私にとっては最良の事態だ。しかし、彼らの目的は私に対する援助ではなく憎しみなのだから、私が滅びるだけでなく、私を滅ぼそうと企む者どもも一緒に滅びることになるかも

最後の2行は、この劇の結末を暗示しているかのようである。

ミルトンの初婚の蹟き

ここで、筆者は、一転して、ミルトンが初婚に蹟いた経験について触れてみたい。とはいえ、この〈蹟き〉についての資料はきわめて欠しい。一つには、ミルトンがこの経験については、一切、口を閉ざして、告白のような記録を残していないからである。ことの発端と顛末についてのみ、ミルトンの甥の エドワード・フィリップス が控えめな回想を残しているだけである。以下、エドワード・フィリップスの『ミルトン伝』の中の該当する箇所を（通し番号をつけて）抄訳する。

- 1 聖霊降臨祭の頃だったでしょうか、あるいはもうすこし後だったかもしれません。ミルトン先生は田舎に出かけました。周囲の人はだれもその理由を確かには知りませんでした。せいぜい気晴らしのためだろうぐらいにしか思っていませんでした。ところが、一ヶ月ぐらい経った後、独身で出かけた筈の先生は結婚して帰ってきました。奥さまはメアリという名で、オクスフォード州のショットオーバーの近郊のフォレスト・ヒルに住むチャード・パウエルさん（当時、治安判事をしておられました）の長女でした。近親の何人かが花嫁に付き添って新居にやってきました。この新居にはまだ、父上様も、他の方も、どなたも入居しておりませんでしたので、花嫁やその近親の人たちを受け入れることができました。結婚祝いの宴会や花嫁のお伴の人たちへのおもてなしが何日間も行われました。とうとうお別れのときがきて、お客さまたちがフォレスト・ヒルにお帰りになりますと、後には花嫁だ

けが残りましたが、後に起こったことから推察しますと、花嫁は[新婚生活に]たぶん、あまり満足なさらなかったようです。広大な邸で大勢の人に囲まれて陽気な日々を過ごすのに慣れていた花嫁が、急に学究的な雰囲気の中で暮らすことになり、そのような生活が一ヶ月かそこら続く間、花嫁のお友達からは手紙で、夏が終わるまでみんなと一緒に過ごしましょうよという誘いがひっきりなしに届きました（ひつとすると奥さま自身がそう希望してお友達にせつついたためかもしれません）。結局、指定された時期、すなわち聖ミカエル祭かそこらには戻ってくることに、という条件つきで、外泊の許可が与えられたのです。（*John Milton: Selected Prose*, 426-427）

- 2 聖ミカエル祭になっても、奥さまのご帰宅のしらせがないので、先生は奥さまに帰宅を促す手紙を書き送ったのですが、返事がありません。さらに、手紙を何通か書き送ったのですが、返事がありません。ついに先生は、手紙を下僕に持たせて、奥さんの帰宅を促しましたが、この下僕は1通の返事 - すくなくとも納得のいく返事 - も貰えずに、すごすごと戻ってきました。そして、私の記憶に間違いがなければ、彼はなにやら侮蔑的な言葉で追い返されたとのことです。

（同上, 427）

- 3 先生は、たいへん怒って、このような拒絶を受けたからには、二度と再び奥さんを迎え入れるのは沽券にかかわるとお考えになり、ただちにそのご決意がいかに正当であるかを立証するための論拠でご自分の主張を強化する準備にとりかかり、その産物として、ご自分の主張を擁護する二編の論文をお書きになりました。（同上, 427-428）

抄訳1は、メアリが、夫の許可を得て、一夏、結婚前の友達（むろん女性の友

達であろう) と楽しく過ごすにいたった経緯である。結婚前と結婚後の生活環境の差を考慮すれば、メアリの帰郷願望にはいくばくかの同情の余地がある。しかし、当時の倫理(=ピューリタン道徳)の基準に照らせば、新婚早々、新妻のとった行動は言語道断の謗りを免れないであろう。ミルトンが妻の里帰りにしぶしぶながら同意を与えたのは、彼がすくなくとも偏屈な道学者ではなかったことを窺わせるに足る。

抄訳2は、エドワード・フィリップスの記述が、事実、その通りであったとすれば、メアリ(あるいは実家の人びと)のとった態度は言語道断というべきであろう。背後の事情について、フィリップスはうがった観察をしている。いわく、

この家族[メアリの実家の人びと]は、彼らの言葉によれば、おおむね「王党派(Cavalier Party)びいき」でした。中には、国王に仕える役人もいた、と想像できないでもありません。王党派はこの時期にはオクスフォードに本拠を構えていて、勝利の見込みがいくらかあったのでしょう。彼らは同族の長女を、見解を異にする人物に嫁がせたことを後悔し始めました。宮廷側が再び勢いを盛り返すときがきたら、この縁組みは家紋に汚点を残すことになるだろう、と考えていたのです。

(同上, 427)

つまり、メアリの一族は、政治情勢の雲行きを眺めつつ、王党派が近い将来に勝利するだろうと期待していたものと思われる。事実、それが、ミルトンがメアリに宛ててせっせと書き送った手紙のすべてが〈なしのつぶて〉に終わった理由だとフィリップスは見ているのである。筆者も、フィリップスの見方に賛成である。そうすると、ミルトンは、選りに選って、なぜ、政治的立場を異にする王党派の娘と、1ヶ月足らずの間に、結婚したのであろうかという疑問が

生じる。ミルトンの父は裕福で、フォレスト・ヒルあたりにも広大な土地を所有していたらしいので、息子のミルトンは賃貸料の取り立てか何かの用事でリチャード家に出向いたのかもしれない。そんな折りに、たまたまミルトンはメアリを見染めて、求婚したのかもしれない。あるいはまた、政治的・軍事的情勢が流動的であったピューリタン革命勃発の当初、パウエル家の当主 リチャード・パウエル判事は、ピューリタンが勝利した暁にはピューリタン側についていたほうが有利かもしれないと考えたのであろう。これらはすべて憶測の域を出るものではないので、筆者も憶断を慎まねばならないが、政治的・宗教的立場を異にする家柄の間の結婚が一種の〈危うさ〉を孕んでいることは、一般論としては認めざるをえないであろう。筆者は、ここで、サムソンが ティムナの娘と結婚したいと父親に申し出たとき、父親が「なにも異教の娘と結婚することはないではないか。同族の娘の中にも、結婚相手はいくらでもいるだろうに」と言って慨嘆したことを思い出すのである。むろん、筆者は、ティムナの娘をメアリと単純に同一視するつもりはないが、メアリと結婚した時点で、ミルトンが この問題、つまり、異宗教・異民族・異文化に属する男女の結婚に内在する危機の可能性について、どれほど透徹した認識を持っていたか、疑問の余地なしとしないのである。しかし、メアリとの結婚で味わった苦渋に満ちた経験からミルトンが理想的な結婚の在り方について深い反省を強いられたことは間違いないと思う。それがあの一連の「離婚論」となって結実した、と筆者は考えるのである。

筆者がここで、もう一つ考察してみたいのは、メアリが夫に対する不従順を詫びてミルトンの家に戻ったとき、ミルトンが彼女を許し、受け入れた度量についてである。他に依るべき資料がないので、再びエドワード・フィリップスの証言を拙訳で引用する。(通し番号をつけて小節に区分したのは、読み易さと引証の利便のためであって、原文は一つの節の中で連続している。)

- 1 先生が新居に移られる前のひととき、事態は思わぬ方向に展開することになりました。もっとも、その展開が先生の人生行路をがらりと変えることにはなりませんでしたが、ある縁談が足踏み状態になる、というか、お流れになったことは事実です。この縁談が、当時、ちょっとした波乱を巻き起こしたのは、ほぼ確かと思われます。デビッド博士の息女の一人がミルトン先生の再婚相手の候補に上がったのです。この婦人は、たいへん立派で、頭もよいかたでしたが、この縁談に乗り気ではなかったそうです。しかし、ミルトン先生の再婚のうわさが伝わると、当時、国王側の立場が弱まっていた上に、治安判事パウエルさんの家庭の事情も手伝って、パウエル家の人びとは、すこし前にミルトン家に嫁がせた娘[メアリ]の復縁に全力を傾注しました。それで、彼らは、とりあえず、つぎのような策略を立てたのです。

(同上, 428)

- 2 近くの 聖マルティン・ル・グランの路地裏に、ミルトン先生の親戚筋にあたるブラックバラという人が住んでいて、この人の家を先生がしばしば訪ねていることがわかりましたので、この際、先生の同家への立ち入りを注意深く監視しようということになりました。これは、もしかしたら、ミルトン・パウエル両家の合意の上でのことだったかもしれません。両家の友人たちが協同して—といっても、それぞれ違う動機からですが—同じ行動に参加したわけです。 (同上, 428-429)

- 3 他のどんなときよりも[好都合な]あるときのことです。先生がいつものようにこの家を訪問しますと、別室で待機していた奥さまが、突然、先生の前に現れて、膝まづき、従順な態度で、先生のお許しを乞うたのです。先生は奥さまとは二度と再び会わないおつもりでしたから、びっくりなさいました。先生は、最初はむっとされ、奥さまの懇願を

拒否しかねないご様子でしたが、まもなく、過去のことは水に流し、未来に向けて堅い平和の契りを結ぶお気持ちになりました。これは、一つには、先生が[対立よりも]和解を好む寛容な性質の持ち主であったこと、もう一つには、両家の友人たちが中に入って熱心に和解を勧めたこと、によるものでした。(同上, 429)

抄訳1で事態が「思わぬ方向に展開した」と筆者は一種の<説明訳>を試みたのだが、原文は“there fell out a passage”である。「思わぬ方向に」と補足したことには異論が予想されるが、文脈を考慮すればあながち誤訳ともいえまい。要は、メアリの里帰りが長引いた後、ミルトンに縁談が持ち上がった、という話である。それで、このうわさを耳にしたパウエル家ではひと騒動が起こった。王党派が、初期の予想に反して、劣勢に転じたために、パウエル家では、急遽、メアリをミルトンのもとに送り返して、自家の安泰をはかろうと画策したのである。この復縁策にはミルトン家側にも賛同者がいたと見えて、双方の友人たちが復縁のお膳立てをすることになった。それが、抄訳2の趣旨である。抄訳3は、この復縁策がどのように実行されたかを描写したものである。

注目すべきは、抄訳3の場面で、エドワード・フィリップスが「先生は、最初はむっとされ、奥さまの懇願を拒否しかねないご様子でしたが、まもなく、過去のことは水に流し、未来に向けて堅い平和の契りを結ぶお気持ちになりました」と述べている箇所である。さらに、その理由として、フィリップスがミルトンの「寛容な性質」と「友人たちの[和解に向けての]熱心な勧め」を挙げているのも注目に値しよう。筆者は、フィリップスの観察は正鵠を得ている、と思う。

メアリの復縁を受け入れた時点で、ミルトンとはすでに「離婚論」を公けに

していた。彼の主張の特徴は、離婚を正当化する理由として夫婦の「性格の不一致」を強調した点にある。ミルトンとメアリとの間に「性格の不一致」があったかどうかは不明である。ミルトンは「離婚論」の中で、夫にとって結婚の持続を困難にする妻の条件として、「無口で、生氣のない」(“mute and spiritless”)「生氣の枯渇した」(“deadness of spirit”)「粘液質の、土塊を絵に描いたような」(“an image of earth and fleam”)な性格、「非妥協的な性格の不一致」(“an uncomplying discord of nature”)「どうしようもない、情感を欠いた、不機嫌のかたまり—そんな妻が傍にいただけで、[夫の]孤独感そのものを目の当たりにするような気がしてくる—」(“a helpless, unaffectionate and sullen mass whose very company represents the visible and exactest figure of loneliness it self”)などの欠陥を挙げている。さらにまた、夫をないがしろにする妻の例として、「夫を放棄する女」(“a desertrice”)「我慢のならない反抗的な女」(“an intolerable adversary”)「敵意むきだしの政敵」(“a bitter political foe”)などを挙げている。⁴ フェミニストならずとも、これはどうかと思わずにはいられない女性蔑視の記述であるが、メアリの場合、すくなくとも「夫を放棄する女」には該当するし、他の項目、たとえば「敵意むきだしの政敵」なども、あるいは当たっているかもしれない。王党派びいきのパウエル家で育ったメアリが、ミルトン家に嫁いできたものの、政治的立場を異にする夫との生活に違和感を覚え、里帰りの後、しばらくは夫のもとに帰りたくなかったとしても、心情的には理解できなくもないのである。しかし、妻としてあるまじき、そのようなメアリの振る舞いにプロテスタントのミルトンが「たいへん怒った」のも当然で、それは既述した通りである。

離別 から3年経って、メアリが自らの過失を反省し、夫に許しを乞うたとき、

⁴ Barbara K. Lewalski, *The Life of John Milton*, 163.

ミルトンは、なにがしかのわだかまりを胸中から払拭しえなかったであろう。しかし、そのミルトンが、友人たちの「熱心な勧め」があったとはいえ、結局、妻と和解する気持ちになったのは、つまるところ、彼の〈度量〉の大きさ（ミルトンの、いわゆる“magnanimity”）を示すものであろう。妻との妥協を拒否する心境から、妻との和解に同意するにいたるまでの、ミルトンの心理的葛藤は並大抵のものではなかったと想像されるが、とにかくミルトンは和解の道を選択したのである。そこにわれわれはミルトンの〈拒絶〉から〈受容〉への転換を読みとることができるのではないかと思う。

ここで、「闘士サムソン」に話を戻そう。復縁を迫るデリラにサムソンが激しい拒絶反応を示し、最後まで、彼女との和解を拒否したのは、既に見たとおりである。サムソンが和解を拒否したのは、ミルトンがメアリと和解したのと、一見、対照的に見えよう。しかし、ミルトンの眼前にメアリが現れて、許しを乞うたとき、直ちにミルトンが許しを与えて、妻と和解したのではないという点に注目する必要がある。そう安々と妻を許したわけではないのである。つまり、ミルトンの心理は、メアリとの離別中、相当に鬱屈していたと見てよい。一方、サムソンの眼前にデリラが現れたことをコロスから告げられると、とたんに、サムソンは彼女の過去の裏切り行為を思い出し、「私の妻だって！私を裏切った妻だって！近づかせないでくれ！」と、怒りを露わにする。そして、彼女が雄弁に〈和解〉を訴えている間中、サムソンの鬱勃たる怒りは抑えようがないのである。ダリラの裏切り行為のそもそもの原因が彼自身の「人間的な弱さ」にあることをすでに十分に痛感していたサムソンではあるが、そのサムソンはダリラの雄弁の中に欺瞞が宿っていることを見抜き、最後まで彼女の要求を拒否するのである。ダリラの欺瞞は、サムソンの断固たる〈拒絶〉に遭った彼女が傲然と立ち去る際の、捨てぜりふの中に読みとることができる。

ダリラ

どうやらお怒りが鎮まりそうもないわね。

どんなお願いにも聴く耳をお持ちでないようね。風や波のほうが、ずっと素直だわ。

どんなに荒れていても、最後には、風は波と、波は岸と、和解しますもの。

あなたのお怒りは、鎮まることなく、いつまでも荒れ狂って、決して止むことのない永遠の嵐、といったところね。

こんなに謙虚に和解を求めているのに、どうして、あたしは憎悪と拒否しか与えられないのでしょうか？

これ以上、あなたの問題に気を遣うなんて、あたし、まっぴらだわ。

これ以上、あたしの気遣いを悪しざまに非難されるなんて、まっぴらだわ。

名声には二つの顔はなくとも、二つの口があるのですよ。

.....

.....

あたしの名は、たぶん、ダン、ユダ、あるいは国境いの、割礼を受けた人びとの間では、

子々孫々、中傷され、呪いを浴びせられ、

不貞の妻という忌まわしいレッテルを貼られて非難されるでしょうよ。

でもね、あたしの祖国、あたしが愛してやまない

エクロンやガザ、アシドドやガテでは、

最も名高い女の一人として、あたしの名があげられ、

厳かな祝典で歌われ、

夫婦の契りを破棄してでも狂暴な破壊者から祖国を救うほうを選んだ女として、生きている間も、死んでからも、記録に

残るのですよ。

(960-985)

こう言い捨てて、ダリラが立ち去ると、友人たち[コロス]は、ダリラの欺瞞を見抜いたサムソンの慧眼に感服し、

行ってしまいましたよ。今まで隠していた蛇の毒牙も、ついに、ばれてしまいましたね。

(997-998)

と感想を述べるが、それに対するサムソンの応答は、ダリラへの非難ではなく、彼女の誘惑に抗しえなかった己れ自身の「弱さ」への自責である。彼は言う。

それなら行かせるがよい。神は、私を低め、私の愚かさをいっそう愚かしくするために、あの女を遣わしたのだ。そして、この私は、あんなまむしに、神の至聖なる秘密の信託、私の安全、私の生命、を任せてしまったのだ。

(999-1012)

ここで、サムソンのいう「神」がイスラエルの神を指していることは明らかであろう。『闘士サムソン』の中で、主人公やコロスやマノアが「神」に言及するときも、同様である。それが、この作品の基本的性格を「ヘブライ的」であるとする解釈の一つの根拠であることは言うまでもない。一方、「キリスト教的」解釈に立つ批評家の多くは、サムソンの〈拒絶〉から〈受容〉への転化を「再生」(“regeneration”)という、神学的な匂いのする語で説明するが、筆者はこれを意識的に避け、〈受容〉という、より広い「人間学的」な響きをもつ一般的な語で説明したいのである。

闘技場への召喚を甘受するサムソン

『闘士サムソン』は謎に満ちた作品である。数ある謎の中でも、最大の謎は「サムソンは闘技場への召喚を最初は拒否しておきながら、なぜ、2度目には受諾したのか？」である。問題になるのは、テキストのつぎの箇所である。

[ペリジテの役人との最初の問答]

サムソン お前も知っているとおりに、私はヘブライ人だ。だから、こう伝えてくれ。

私たちの掟は、お前たちの宗教の儀式に私が出ることを禁じているとな。そういうわけだから、行くことはできぬのだ。

役人 そんな返事では、いいか、お偉方は納得しないぞ。

.....

.....

役人 身の安全を考えるがよい。そんな返事をする、お偉方の機嫌を損ねるぞ。

サムソン 身の安全を考えろだと？ 私の眼中にあるのはな、己れの良心と魂の平安だ。

.....

.....

たとえ奴隷の身であっても、あの連中の道化となって、ご機嫌をとり、自分自身は悲しみと心痛に見舞われながらも、連中には力技を披露し、彼らの神の前で余興を演じるとなれば、こんな屈辱はないのだ。その上、ひどい蔑みにも耐えねばならぬとは。私は行かないぞ。 (1319-1342)

[ペリジテの役人との二回目の問答]

役人 サムソン、お偉方からの第二の伝言を
お前に伝えよとのご命令だ。お前はわしらの奴隷であり、
捕虜であり、粉挽き場で働く囚人ではないか。
それなのに、お前はお偉方の命令を伝える使いの者に対して
なにやかやと難癖をつけて、ぐずぐずしている。つべこべ言わ
ずについて来い。
もしも来ないなら、拷問の足枷にかけてでも、
有無を言わさず引っ張って行くぞ。
たとえお前が、岩よりも頑固に抵抗しても、だ。

サムソン 喜んで彼らの計画を試してみてもよい。
その結果、予想もしていない災難の被害者が、多数、出ないと
もかぎらないが。まあ、しかし、連中の方が圧倒的な優位にあ
ることは分かっているし、野獣のように町中を引き回され
るのはまっぴらだから、参上してもよい。
絶対的な服従を余儀なくされている者としては、支配者の命令
には抵抗しようもない強制力があるからな。
生命を助けてもらうためなら、誰だって自分の目的を変えるだ
ろうからな。(人間の処世なんて、実に変わり易いものだ。)
しかし、われらの掟から言って、恥ずべきこと、禁じられてい
ることには、何一つ、応じないぞ。分かったな。

役人 お前の決心を誉めてつかわそう。さあ、鎖を解け。
お呼びに応じたからには、お偉方のお情けで、
もしかしたら、お前も自由の身になれるかもしれないぞ。

(1391-1412)

有無を言わせずサムソンを連行しようとする役人に対し、サムソンが「絶対的な服従を余儀なくされている者としては、支配者の命令には抵抗しようもない強制力があるからな」とか「生命を助けてもらうためなら、誰だって自分の目的を変えるだろうからな」と言いながら、同行に同意を与えている点は、それまでのサムソンの〈拒絶〉的姿勢と著しく相違している。批評家は「それは、なぜか？」という疑問に答える責務があろう。一部の批評家によれば、これはサムソンの敵を欺く「擬装」(“feint”)であるという。しかし、サムソンが、ここで、なぜそんな見え透いた「擬装」をしなければならないのか、という疑問は依然として残る。筆者はむしろ、サムソンの本心は(人間の処世なんて、実に変わり易いものだ)という、やや自嘲的なつぶやきの中に窺うことができると考える。この〈自嘲〉は、『闘士サムソン』の「プロロゴス」(1-114)から「第4の場面」(1061-1267)までのサムソンの科白を貫く〈自己憐憫〉と〈自己嫌悪〉のかすかな残響と見るべきであろう。現実〈拒絶〉から現実〈受容〉への転化の過程でよく見られる現象だからである。

サムソンがようやく〈受容〉の心境に達したと見られる時点で、傍観者としてのコロスは、単純にもサムソンの過去の栄光の再現を信じて、つぎのように祈願する。

コロス では、行きなさい。イスラエルのいとも聖なる神が
あなたをお導きくださいますように。神の栄光のために
最善をつくし、周囲の異教徒たちに、神の大いなる御名を
広めることができますように。
マノアの妻にあなたの受胎を告げた後、
あなたの父上の畑から炎となって昇っていった、あの天使が
あなたのもとに遣わされて、あなたの傍にしっかりと立ち、
こんどは火の楯となってくださいますように。

ダンの戦いの幕営で、はじめてあなたの上に降った、あの霊が、このたびの緊急事態の中で霊験をあらわしてくださいように。

と申しますのも、あなたの驚くべき戦闘に見られた、あれほどの威力は未だかつて天から人の子孫に与えられたことがないのですから。 (1427-1440)

コロスがこのようにサムソンの勝利を祈願しているとき、年老いたマノアが足取りも軽やかに戻ってくる。コロスはその理由を尋ねると、マノアはつぎのように答えて、息子の身柄の釈放の近いことを告げる。

マノア 同胞の皆の者よ、神の平安が皆の者にあるように！ わしがここに戻ってきたのは、いまここに息子がいると思ってではない。息子はお偉方の命令で、もうここを離れ、祭りの余興として彼らの前で芸を披露することになったそうだ。わしは、ここに返ってくる途中で、ことの一部始終を聞いたのだ。 ……………
……………
わしがここに戻ってきたのは、息子の身柄が釈放される見込みのあることを皆の者に知らせたかったからなのだ。

(1445-1454)

そして、マノアは、連綿と息子の安泰を願う父親の心情を吐露するのである。このあたり、マノアの科白は手放しの喜びに溢れていてほほえましいが、突然、大音響とともに事態は一変する。闘技場の観客席を支える大柱をサムソンが揺り動かした結果、観客席が瓦解し、多数のペリシテ人がその下敷きになったからである。むろん、サムソン自身も瓦礫とともに壮絶な死を遂げるのであるが、その模様は、辛うじて難を逃れた使者によって、つぎのように伝えられる。使

者の[最初の]言葉は、簡潔で、印象的だ。

使者 [サムソンは] 敵の傷を受けずに 倒れました。

マノア では、虐殺に疲れてか？ それともどんなふうになのか、話してくれ。

使者 ご自分の手で。

マノア 自分の手で？ どうして

敵の中で、息子がそんなに早く、われとわが身を敵にしてしまったのか？

使者 避けられない理由がございました。

敵を滅ぼすと同時に、自分自身をも滅ぼしてしまったのです。

彼を一目見ようと皆が集まっていた建物を、

彼はそれらの人びとと自分の頭上に引き倒してしまったのです。

マノア ああ、なんたることよ！サムソンよ、お前は、最後には自分自身を滅ぼすほど、強かったのだ。

なんとまあ、恐ろしい方法で復讐を遂げたのだろう。[使者に向かって] 十分すぎるほどよく分かった。しかし事態はまだ混乱しているのだから、もしできれば、目撃者として、この一部始終をもっと詳しく、はっきりと話してくれ。(1582-1595)

以下、サムソンの死にいたるまでの使者の詳しい報告が続くのであるが、ここではその詳細を再述する必要はなかろう。ただ、サムソンの死が肉親や同胞にとっていかなる意味をもっていたかを知るためには、[最後の]コロスとマノアの述懐を吟味する必要があるだろう。

コロス ああ、なんと高い代価を支払って成し遂げた復讐でしょう。

しかし、なんと輝かしい復讐でしょう！

生きている間も、死に臨むときにも、あなたはイスラエルに予言されていた解放の業を果たしました。そして、あなたが滅ぼした敵の中で自らも滅ぼされ、いまは勝利の中に横たわっておられます。

自ら進んで命（いのち）を投げ出したのではなく、恐ろしい必然の襲（ひだ）に絡まれて、あなたが生前に滅ぼした敵よりもはるかに多い亡骸とともに横たわることがあなたの運命（さだめ）でした。 (1660-1668)

マノア さあさあ、今は悲しんでいる時ではない。悲しむべき理由もあまりないのだ。

サムソンはサムソンらしく死んだのだ。そして英雄的生涯を英雄らしく終えたのだ。敵に対しては、十分に復讐を果たし ……………

イスラエルには、名誉と自由を残し

彼自身と父祖の家には不朽の名声を残して。

そして、最良にして幸いなことに、最初の懸念に相違して、神は息子から離れずにいてくださったのだ。

最後まで恵みと助けをお与えくださったのだ。

ここではもう涙を流すことなどない。嘆き悲しむこともない。

胸を打って悔いることもない。弱さも、汚辱もない。

不評も非難もない。良いこと、麗しいことばかりだ。

これほど崇高な死を迎えたとなれば、われわれの心も安らぐというものだ。 (1708-1724)

コロスの追懐も、マノアの感懐も、ともに〈悲劇〉としての『闘士サムソン』の結末にふさわしく、アリストテレスの謂う「カタルシス」効果を上げている

と思う。拙論の趣旨からいえば、しかし、上記のコロスの追懐の中の「自ら進んで命（いのち）を投げ出したのではなく」の語句がとりわけ意味深長であると言わねばならない。原文は“self-killed / Not willingly”（1664-1665）である。ここで“self-killed”とあるのは、いわゆる「自殺」のことではない。「結果として、自らの命（いのち）を失うことになった」という意味に解すべきである。サムソンが闘技場に向ったとき、彼が、圧倒的に多勢のペリシテ人を相手にたった一人で戦いを挑んで自滅するという選択を自らの意志で選んだのではないのだ。確かに、サムソンは、闘技場で予期せぬ事態が起きて自滅することになるかもしれないと漠然とは感じていたであろう。しかし、それは、いわば、覚悟の上のことである。サムソンが闘技場に向う直前に、コロスに向けて投げかけた〈別れの言葉〉には、この覚悟が秘められている。

サムソン では、同胞の皆さん、ご機嫌よう、ついて来ないでくださいよ。
友人たちに囲まれて入場する私を見て、
お偉方たちが気を悪くするとまずいからね。共通の敵として
かつては恐怖の眼差しで眺めていた、この私の姿を連中が見たら、
こんどはどんな怒りを爆発させるか分からないからね。
.....
.....

どんな事態が起ころうとも、私たちの神、私たちの律法、私の同胞、そして私自身にとって不名誉なこと、不純なこと、ふさわしからぬことを、この私がしたという噂を耳にすることは絶対にないと思っていただきたい。

これが今生（こんじょう）のお別れになるかどうかは保証のかけりではないが。
(1413-1426)

ここには、自らの理想を堅持しつつも、自らの置かれた現実的状况を冷静に〈受容〉し、それが、たとえ自らの命（いのち）を失う結果になろうとも、その結果をあえて〈甘受〉する、という静謐な精神がある。これが、過酷な試練を経て、ようやくサムソンの到達した心境である。それは、ミルトンがその闘士の生涯において最初に経験した挫折—すなわち初婚の躓き—とその挫折に伴う精神的な苦悩からの自己回復と軌跡を同じくする。ミルトンは〈拒絶〉から〈受容〉へと向う自らの精神の動きを『闘士サムソン』の主人公サムソンのそれに投影して見せたのである。

参照文献

小森禎司・小森知子 編訳、『力者サムソン—サムソンとダリラ』，山口書店，1993.

滝沢正彦 編，『闘士サムソン』（小英文学叢書），研究社出版，1996.

Hanford, James Holly. *A Milton Handbook*, 1926; 4th ed., 1946, F. S. Crofts & Co.

Krouse, F. Michael. *Milton's Samson and the Christian Tradition*, Princeton University Press, 1949; repr. Archon Books, 1963.

Lewalski, Barbara K. *The Life of John Milton*, Blackwell, 2000.

Low, Anthony. *The Blaze of Noon: A Reading of Samson Agonistes*, Columbia University Press, 1974.

Nicholson, Marjorie Hope. *John Milton: A reader's guide to his poetry*, Copyright 1963 by the Author; repr. Octagon Books, 1983.

Parker, William Riley. *Milton's Debt to Greek Tragedy in Samson Agonistes*, The Johns Hopkins Press, 1937.

Patrides, C.A., ed. *John Milton: Selected Prose*, University of Missouri

Press, 1985.

Radzinowicz, Mary Ann. *Toward Samson Agonistes: The Growth of Milton's Mind*, Princeton University Press, 1978.

Wittreich, Joseph Anthony [Jr]. *Interpreting Samson Agonistes*, Princeton University Press, 1986.

———, ed. *Calm of Mind: Tercentenary Essays on Paradise Regained and Samson Agonistes in Honor of John S. Diekhoff*, The Press of Case Western Reserve University, 1971.